

森林太郎「山辺君墓表」のこと

— 森鷗外と山辺夫妻 —

橋 口 真 理 子

はじめに

大阪市内にある大阪メトロ谷町線阿倍野駅。駅前繁華街を抜け一筋入ると辺りには下町の風景が広がり、徒歩数分もすれば市民霊園に行き当たる。そこに森鷗外の撰による墓碑があることは知られていない。碑名は「山辺君墓表」、文末には「大正十一年一月 文学博士 森林太郎撰」とある。「山辺君」とはいったい誰なのであろうか。「山辺君」は鷗外とどのような関わりを持っていたのであろうか。

そして「山辺君墓表」の隣には彼の妻の歌碑が建てられている。実は、夫だけではなく妻もまた森鷗外と浅からぬ所縁を持つ者なのである。

本稿では、「山辺君墓表」について読み解き、関連資料を紹介することで、森鷗外と山辺夫妻との関係性および彼らを取り巻く人々について照射していきたい。

「一」 「阿倍野墓地」の一角、「山辺家墓地」

1. 「山辺家墓地」内の墓碑

「大阪市設 南霊園」は市設で最も古い大規模霊園の一つで、明治七年に設置され墓数はおよそ一三八〇〇基。実業家五代友厚や元大阪

市長・関一などの格式高い墓がある一方で無縁者も多く埋葬されている^①。「山辺君墓表」建立当時（大正二年）には「阿倍野墓地」と呼ばれていた。そのような「阿倍野墓地」の一角に、山辺家代々の墓石・墓碑が立ち並ぶ埜域「山辺家墓地」がある。

「山辺家墓地」の中央には鳥居が設置され、その向かって右にあるのが「山辺君墓表」である。「山辺君」とは「山辺丈夫」（嘉永四―大正九年）のことを示している。向かって左にはそれに劣らぬ大きさの立派な歌碑がある。こちらは丈夫の妻山辺定子（万延元―昭和二四年）の「山辺定子歌碑」である（写―1参照）。

鳥居をくぐって中に入ってみると、三基の墓石が並んでいる（写―2参照）。中央の墓石はひと際大きいのが目立ち、「山辺龍一之墓」と刻まれている。左には「従五位 九代 山辺丈夫之墓 同妻定子之墓」、右には「八代 山辺正義之墓 同妻喜勢子之墓」が位置している。写真には写っていないが、ほかにも「山辺家 累代諸霊之墓」があり、表面が落剥した歌碑も見られる。

次項ではそれぞれの墓碑について詳解していきたい。

2. 「山辺君墓表」

本文および要約

山辺君墓表 伯爵亀井茲常篆額



写一2

中央：「山辺龍一之墓」
 右：「八代 山辺正義之墓 同妻喜勢子之墓」
 左：「從五位 九代 山辺丈夫之墓 同妻定子之墓」
 (筆者撮影)



写一1

右：「山辺君墓表」
 左：「山辺定子歌碑」

(筆者撮影)

明治中興 百度更新 始与海外諸国貿易 而輸入外物 棉布居十之七 洪沢栄一与藤田傳三郎松本重太郎等謀 欲興紡績会社于大阪以拯此弊 募資華胄与富民 規画就緒 求監工場督職事者 頗難其人 物色四方 而獲山辺君矣 君諱丈夫 本清水氏 小字虎槌 更善藏 父曰格亮 母吉松氏 嘉永四年十二月八日生於石見国津和野 安政元年為山辺正義所養 冒其氏 明治三年君詣東京從中村敬宇西周福沢諭吉等游 習英語 又問殖産事 十年会前津和野藩主龜井伯茲明之英 君從之 攻經濟学于王学院 時有津田東者 說洪沢栄一 欲聘君 君諾 於是治機關学于倫敦大学 又歷訪諸市工場 与衆工伍 索術於隱微 十三年還 所謂大阪紡績会社者至此始成 設工場於三軒家 君為工務支配人 二十三年併合大阪織布会社 二十八年君為会社取締役 兼工務長 三十一年為会社長 三十三年為大日本紡績聯合会委員長 三十五年敕賜綠綬章 大正三年我会社与三重紡績会社合 為東洋紡績会社 君長之 敕賜綠綬章飾版 四年特旨敘從五位 五年辭職 肥遜須磨別業 九年五月十四日病歿 享年七十 葬阿倍野 君娶相沢氏 名定 生子龍一 夭 養姪清亮 為嗣 聞之吾邦紡績之業 至島津侯齋彬始用機關 幕府末造設工場於采邑 業不甚振 維新後松方正義為勸業局長 分置紡績機關于大阪岡山奈良愛知宮城栃木広島諸府県 所製棉糸皆未精良 其遂振起此業 使内産糸視外産糸毫無遜色 以減輸入增輸出者 實始於大阪紡績会社 而会社致之 實由有君拮据尽瘁 終身不倦 然則君於吾邦産業 其功豈鮮少哉 君歿之二年 知君者胥謀 助貲立石 以為不朽計 嗣子清亮請予刻文 乃叙君世系功績 以授之

大正十一年一月 文学博士 森林太郎撰 磯野惟秋書^②

本文の中には、「山辺君」こと「山辺丈夫」の来歴が記されている。内容の要約をすると左記のとおりである。

- ① 明治期、日本の海外貿易・産業発展のため紡績会社を興すことになり、「渋沢栄一」らがその中心となる人物を探し尽くした結果、山辺丈夫が抜擢された。
- ② 山辺丈夫が「石見国津和野」の「清水」家に生まれ、「山辺」家の養子となった。
- ③ 上京をして「中村敬宇・西周・福沢諭吉」らに学び、英語を習得した。
- ④ 「津和野藩主 亀井茲明」に随従しイギリス留学をして「倫敦大学」で「経済学」を学んでいたが、「渋沢栄一」からの要請により「機関学」に専攻を変えた。
- ⑤ 「歴訪諸市工場」とあるように、実際にイギリス諸市（筆者注…ブラックバーンやマンチェスター）の工場に赴き、技術者として現場で学んだ。
- ⑥ 留学先で学んだことを生かし、帰国後「大阪紡績会社」を興し、「三軒家」（筆者注…現在の大阪市大正区）に工場を構えた。「工務支配人」つまり技術上の最高責任者として務めた。
- ⑦ 会社が合併し「東洋紡績会社」となつてからも社長に推薦され、その後「大日本紡績聯合会委員長」なども歴任した。
- ⑧ 数々の功績により「緑綬章」「緑綬章飾版」「従五位」に叙せられた。
- ⑨ 「吾邦紡績之業」において、「未精良」であった「内産糸」を「外産糸」と遜色ない高品質な製品へと改良し輸出を増やし、幕末以来の悲願を果たした。
- ⑩ 丈夫が「拮据尽瘁」「終身不倦」、つまり終生たゆまぬ努力を続け

たことを鷗外は称賛しており、我が国の産業において「其功豈鮮少哉」とその功績を評価している。

- ⑪ 相沢定（子）と結婚し、生まれた長男龍一が夭折し、養子清亮を迎えた。
- ⑫ 本文が記されたのは大正十一年一月で、養子清亮から撰文を依頼されたのがきっかけであった。丈夫はその二年前に七〇歳で「病歿」しており、「阿倍野」の地に埋葬された。
- ⑬ 「篆額」つまり題字は旧津和野藩主に相当する「伯爵亀井茲常」によるもの。茲常は茲明の嫡男であり、亀井家当主であった。

森鷗外の手になる山辺丈夫の略歴は、ほぼ史実に沿ったものである。

一般的には山辺丈夫は実業家として認識され、東洋紡績会社初代社長として知られている。長年の付き合いがあった渋沢栄一は丈夫のことを次のように言う。

清廉、潔白、且つ純朴、質実、稀に見る人で、朝廷に於ても其功を認められ、今日実業家の到底企及すべからざる表彰、位階、令旨等を賜はつたことは、亦君の効績を語るものであらう^⑬

イギリスに留学し現地地機械工学について学び、帰国後は渋沢とともに大阪紡績を設立。紡績聯合会委員長、東洋紡績社長に就任し、「日本紡績業の父」として日本の産業革命を推進した。これが公の経歴である。「山辺君墓表」に書かれていないのは、森鷗外その人との関わりである。

「山辺君墓表」執筆の経緯

「山辺君墓表」の中に、鷗外が撰文を担うことになった経緯について記述がある。「嗣子清亮請予刻文」の部分から、養嗣子清亮の依頼によるものであったと分かる。大正九年一月一七日の「鷗外日記」には「山辺清亮始来見、清亮丈夫之嗣子也」とある⁴。この日が鷗外と清亮の初対面であったと考えられる。同年五月一四日に丈夫は死去しており、半年ほど経ったこの日に墓表撰文を依頼された可能性がある。「山辺君墓表」本文末の日付には「大正十一年一月」とある。しかし同年の七月九日、鷗外も病を得て病歿している。実際の碑の建立は大正一二年五月であったが、鷗外はこの日を待つことなく天に召されたのである。山辺丈夫と森鷗外との個人的な関わりについては後述したい⁵。

3. 「山辺定子歌碑」

〈歌碑表面〉

そのかみをしのひて 七十七媼 定子
外国のたひのいとなきひまひまにわか背の君のたひしたまつさ

〈歌碑裏面〉

山辺定子刀自は参州西尾藩主松平和泉守乗全君の御側医相沢朮翁の次女として万延元年十月三日江戸深川万年町に生れ後津和野藩士山辺丈夫君に嫁ぎぬ丈夫君明治の初年海外に航し帰朝して大阪紡績会社東洋紡績会社を建設しこれが社長となりて斯界の重鎮たりき刀自克く夫君と辛苦を共にし内助の功尠からず刀自が歌に志たるは父翁の勸によるものにして初め予の先考に教を請ひ後予に就きて学び古稀の記念には浦のみるめを喜寿の記念には須磨の浦

浪を上梓し現に須磨孤山荘に老を養ひたすら詠歌に楽しめり刀自婦徳甚だ高く夫に事へて賢淑人に接しと懇切情操極めて豊かに藻思殊に贍らひ婦人の亀鑑たり頃者有志相謀りて刀自の為に歌碑を建て予に囑して其の事を記せしむ碑面の詠は滞英当時の夫君を偲びし作に係る以て刀自の貞節を不朽に伝ふるに足らむ

昭和十二年八月

帝国学士院会員 文学博士佐佐木信綱撰 文学士伊藤寿一書⁷

「山辺定子歌碑」は、「山辺君墓表」建立の一四年後、定子の喜寿を記念して建てられた。碑の表面には「滞英当時の夫君を偲びし作」として一首が刻まれ、「刀自の貞節を不朽に伝ふるに足らむ」と評されている。

裏面には山辺定子の来歴が綴られている。西尾藩主松平家の御典医の家に生まれ、津和野藩士山辺丈夫に嫁ぎ、実業家として成功した夫を支えた「婦人の亀鑑」としてその内助の功を称え、また歌人としても評価をしている。撰文は佐佐木信綱である。信綱は鷗外とも観潮楼歌会などで交際があり親しい存在であった。

定子と佐佐木信綱との関係は世代を遡る。元々、定子の父とその妹西升子（西周夫人）が佐佐木弘綱の門人であった。定子もそれを継ぎ、弘綱が亡くなったあとはその子である信綱に師事した⁸。つまり定子の父母叔母皆が短歌に造詣が深く、佐佐木弘綱・信綱の教えを受け、世代をまたいでの親しい間柄であった⁹。

定子と西升子とは姪と叔母の関係であるが、定子は子どものいなかった西夫妻に可愛がられ、生涯を通じて深い関わりがあった。そしてこの西夫妻の存在こそが、定子と鷗外とを結びつけたものであった（それについては後述したい）。

4. 「山辺龍一之墓」

山辺家墓地の中央の鳥居を潜ると、墓石が三基並んでいる。中央の墓石は突出して大きいことが目立つ。その表面には「山辺龍一之墓」と刻まれ、裏面には「明治廿二年十二月九日歿 行年八歳九ヶ月 大阪府士族 山辺丈夫長男」とある。

山辺龍一は山辺丈夫・定子夫妻の長男である。夫妻のたった一人の子どもで一族の愛情を一身に集めた存在であったが、八歳の時、丈夫が社長を務める大阪紡績工場内の不幸な事故によって命を落とした。

明治二十二年の十二月九日は龍一氏が紡績の器械に触れて悲惨の最後を遂げた日である。(略) 龍一氏は丈夫氏夫妻にとつては一粒種であつたから、掌中の玉の様に可愛がつて居つたのを、一朝にして失つたので、その悲嘆は思はれる。¹⁰⁾

当時の新聞記事には次のようにある。

三軒屋紡績会社社長山辺丈夫氏の長男龍一(九歳)といへるは至つて伶俐き性なれば氏は掌中の球と愛でいつくしみて常に二三人の奴婢を添へ塵さへすゑず育てられしに一昨日午前十一時ごろ同会社の職工場へ遊びに来りたる際いかなる機みにや機械車の大輪に巻き込まれたるにぞソリヤ大変と工場は上を下へと騒ぎ立ちしも其甲斐なく終に無慙の死をなしたる(略) 愛子が非業の最後双親の悲嘆誠に気の毒なり葬儀は昨日なりしが会葬者は凡そ三千人もありて頗る盛んなりし¹¹⁾

また当時の葬儀の様子については以下のようにある。

森林太郎「山辺君墓表」のこと

龍一氏の葬儀の盛大であつた事は、葬列が千代崎橋から阿倍野まで続いたといふ事、(略) 葬儀が盛んであつたばかりでなく、僅に九歳の子供の墓所として実に立派なものが出来、或は鳥居或は石灯籠を供へるものがあつて、当時阿倍野では一二のお墓だと云はれた。是といふも不慮の災に罹つたといふ事と、当時丈夫氏が紡績の工場長で多くの人から信用されてをつたからである。¹²⁾

一人っ子であつたばかりではなく、龍一は聡明で心優しく両親を遣う誰からも愛される子であつたという。この出来事を丈夫は「人生最も悲惨なる起事¹³⁾」と書き記している。定子も長きにわたり床に臥すことになり、上京して赤十字病院で転地療養した。そして主治医から「あなたは最早子供は出来ません」と宣告を受けたことで一層の悲しみの底に落とされた。¹⁴⁾

龍一を失つた喪失感は、山辺夫妻にとつて終生癒えることはなかつた。

龍一の死から四年後、夫妻は丈夫の兄の子である清亮(当時七歳)を養子に迎えることになった。この時の子・清亮が、のちに成人し「山辺君墓表」の撰を鷗外に依頼した、その人である。¹⁵⁾

(明治二十二年十二月九日龍一の身まかりしをかなしみて阿倍野なる奥津城にしるしつる)

ありし世は蝴蝶のゆめかなさけなの花さく春をあとのこして
山辺定子¹⁶⁾

「二」 「津和野藩・亀井家」との関係性

森鷗外と山辺夫妻を繋ぐ源流ともいふべきものが「津和野藩・亀井家」であり、亀井家の中でも殊に第一三代当主「亀井茲明」との関係りは深い。それぞれとの関係をみていきたい。

1. 「津和野藩・亀井家」と山辺丈夫

山辺丈夫の生家と養家

山辺丈夫は、清水家に生まれ山辺家の養子となったのだが、生家養家のどちらも亀井家への強い忠誠心を有していた。

丈夫の生家清水家は「宇多源氏の後裔」であり、国替えて因幡国鹿野の亀井家初代城主亀井茲矩公に仕えた。丈夫の実父格亮は要職を歴任し「亀井家の柱石」となり、明治維新後には「津和野藩の大参事」、明治八年には亀井家家令となり、古稀の齢を迎えた明治二六年までその職を勤め上げた。実母佐渡子も津和野藩士の家筋であり、「佐渡子氏は武士的教養を受けたので（略）丈夫氏が山辺家の養子となつてからも、終始武士の心得やら養家に対する心得を教訓せられた」。丈夫の実兄清も津和野藩主に付き従い、「廢藩置県後同家従となり、終始亀井家の為めに尽す」というほど、清水家は一家をあげて亀井家に忠義を貫いたのである。¹⁷

一方の山辺家は「大職冠藤原鎌足公」を祖先とし、こちらも亀井茲矩公に仕えた。養父正義は藩の要職につき、山辺家は藩内で由緒ある家柄として重んじられていた。¹⁸

山辺丈夫と亀井茲明

亀井茲明（文久元―明治二九年）は孝明天皇の側近であった公卿堤哲

長の三男・亀磨として誕生。明治九年一六歳のとき亀井家の養子として迎えられ、翌年に山辺丈夫を伴いイギリス留学した。明治一三年帰国し、明治一八年第一二代茲監公の逝去により亀井家第一三代となった。明治一九年には美学を学ぶためベルリンに留学し、この留学が丈夫とも鷗外とも縁を深くする（後述）。留学時に伯爵を従位し明治二五年に帰国するが、明治二七年日清戦争勃発にともない、留学先で入手したカメラを携えカメラマンとして従軍した。¹⁹ 戦地では数百枚もの写真を撮影し記録として残したが、戦場生活により体調が悪化し、帰国後の明治二九年、三六歳の若さで他界した。²⁰

山辺家は亀井伯爵家の家臣で有る。明治二年九月二十日以来、亀井公の御思召に依て、君臣の義は絶たれたが、然かし丈夫氏の実父清水格亮氏は亀井家の家令として、明治廿六年七月迄勤続せられた、而して丈夫氏は亀井茲明公に随従して英国へ留学せられ、それに依て運命が開けたので有る、それ故に丈夫氏は、常に亀井家の恩義を忘れずして、尽瘁せられ、亀井家に於ても丈夫氏を其の柱石の一として深く御信頼になつた。²¹

茲明公は丈夫氏を兄の如く、親の如くに慕はせられた、而して亀井家に於て、何事か重大なる事件が起ると、屹度其の事に付て、丈夫氏へ御相談が有つたが、丈夫氏は之に対して、最も忠実に尽力された。²²

山辺家が長年にわたって亀井家に忠義を尽くしてきたことは先にみたが、明治二年の版籍奉還を経て以降もその関係性は変わることはなかった。

津和野から上京した丈夫の「運命が開けた」のは、明治一〇年亀井茲明に随従しイギリス留学したことが契機である。丈夫は亀井茲明の一歳年長にあたり、この留学時丈夫は二八歳、茲明は一七歳であった。丈夫は留学の機会を得たことを恩義に感じ、茲明も「兄の如く、親の如く」一介の家臣として以上の親愛の情を感じていた。

後年に丈夫が大阪紡績会社を設立したとき、亀井家は大阪紡績の大株主でもあった。これにも丈夫と茲明との個人的な親交関係が影響していたと考えられる。⁽²³⁾

亀井茲明は不幸にして早世するが、同年丈夫は亀井家家政相談役となり、その後も亀井伯爵家家令、家政協議員などを務め、亡くなる直前まで亀井家のために尽力した。

茲明の嫡男である第一四代茲常にとっても丈夫は信頼に足る人物であった。明治四四年にはドイツ留学中の茲常に代わり津和野神社の「茲矩公三百年祭」で代拝を務めた。そして同年、茲常の妻久子夫人をドイツの茲常の元に送り届けるという大役も務めている。このとき実に丈夫六二歳、決して若いとはいえない年齢であったが、彼の能力と経験、そして人柄を見込んでのことであった。

以上から、山辺丈夫の生家清水家も養家である山辺家も一族揃って津和野藩および亀井家のために忠義を尽くしていたこと、養子に入ってから丈夫は実母より津和野藩武士としての心得を再三説かれていたこと、丈夫が亀井家の要職をつとめ当主らと個人的な信頼関係を築いていたことが確認できる。

2. 「津和野藩・亀井家」と山辺定子

丈夫氏が英国留学中、刀自には母堂喜勢子氏と向島須崎村の留守宅を守つて居つた。その近くに舅姑の清水格亮氏夫妻が居られた

ので、一家の事は万事格亮氏の指図を受けたのである。(略)丈夫氏留守中の亀井家からの手当のうち、その大部分は格亮氏が預つておいて丈夫氏帰朝の時の用意にするといふ事になった。⁽²⁴⁾

定子が丈夫と結婚した翌年、丈夫はイギリスに留学することとなった。定子は丈夫の一〇歳年下でまだ一八歳の若さでありながら、夫不在のなか、舅姑に仕え亀井家にも仕えるという生活を送つた。厳しい舅の掟の一つに「嫁入の箆筒、長持その外大切な道具は亀井家に預ける事」というものがあつた。⁽²⁵⁾ ここにも亀井家との主従関係が見てられる。それは終生変わることはなかつた。

大正十二年九月一日の関東大震災火災については、刀自には非常に心配せられた。当時刀自の小間使をして居つた某女のはなしに。奥様には東京には亀井家、松平家、西家、清水家等があり。横浜には相沢家があるので、一方ならぬ御心配を為され(略)旧主家や御親類などの上につき心配せられ(略)⁽²⁶⁾

関東大震災が起こつたのは丈夫の死から三年後であるが、定子は夫の生家養家、親族である西家、奉公していた松平家、実家の相沢家と並んで、旧主家との関係性を保つていたことがわかる。

3. 「津和野藩・亀井家」と森鷗外

津和野藩と森家

森鷗外の自伝的要素が投影された小説『平タ・セクスアリス』の中に、津和野での森家の身分を端的に示す箇所がある。

お父様は藩の時徒士であつたが、それでも土塀を繞した門構の家にだけは住んでおられた。門の前はお濠で、向うの岸は上のお蔵である。⁽²⁷⁾

僕は藩の学問所の址に出来た学校に通ふことになつた。

内から学校へ往くには、門の前のお濠の西のはずれにある木戸を通るのである。⁽²⁸⁾

実際に、鷗外の父静男が家督を継いだとき、森家は「徒士」の身分であつた。「徒士」は、津和野藩の武士の階級としては下層に属する。

鷗外の実家は「石見国鹿足郡津和野町横堀」であるが、「横堀」というのは「寛永年間に亀井氏の造成した城の外堀が、鷗外旧宅の前を横に通っていたのでこの名が付けられ」たということである。⁽²⁹⁾

小説内で「門の前はお濠」と記述されたとおり森鷗外の実家の前にはお濠があつた。森家の嫡男として期待を背負っていた鷗外がはじめて学問と向き合つたのは六歳のとき、藩の儒学者村田久兵衛から「論語」を学んだことである。川向うの村田の家に行くには「常盤橋」を渡らねばならなかつた。後の師となる西周の邸宅もやはり「常盤橋」の向こうである。また八歳で入学した藩校・養老館に通うためにも橋を渡らねばならなかつた。向こう岸には立ち並ぶ藩邸が見え、「大橋」を渡るとようやく養老館に到着する。⁽³⁰⁾そして実家の遥か上に聳え立つのは津和野城である。この地理的な配置が、津和野藩下での森家の身分を象徴していた。目の前には明らかなお濠が存在して行く手を阻んでおり、学問に励むことのみがそれを飛び越える手段であつた。しかしいくら努力したとしても超えられない決定的な身分差が存在していた。

結局、森家は一族の立身出世を夢見て、「殿町」とは真逆の方向の「野坂峠」に向かい、上京を目指すのである。

森鷗外と亀井家および亀井茲明

亀井茲明の略歴について先ほどみたが、鷗外との関係でいえば茲明は鷗外の一歳年長であり、ほぼ同世代である。茲明が明治一九年から美学を学ぶためベルリンに留学した際には、先に留学していた鷗外から語学面、生活面での支援を受けている。明治二七年日清戦争が勃発し茲明が従軍カメラマンとして戦地に赴いたときは、鷗外も第二軍軍医部長として従軍しており、戦地でも茲明との交流がみられた。

茲明の死後はその子茲常が第一四代当主となり、二年後の明治三一年、鷗外は次世代の人材育成のため、亀井家の貸費生銓考委員となる。また明治四〇年には亀井家の家政相談人を委任されている。明治四一年三月二二日の「鷗外日記」には「新に家政相談人となりたる西紳六郎、水崎保祐来会す。福羽子と予とを加へて四人となる」との記述があり、津和野藩内での重鎮であつた西周、福羽美静の跡継ぎ達とともに家政相談人を務めていたことがわかる。

その後、明治四二年に亀井家奨学会理事長、明治四三年には奨学会寄宿舎「菁々塾」（県人寮と県支給の奨学制度の原型）にも関わつた。大正一〇年には津和野での顕彰碑「贈正二位亀井侯碑」建立にあたり、亀井茲監事蹟を記している。

このようにみえてくると、鷗外は上京後に再び津和野を訪れることはなかつたが、長年にわたり亀井家との関わりは続いていたのである。

「三」 森鷗外と山辺夫妻

1. 森鷗外と山辺丈夫

森鷗外と山辺丈夫はともに津和野藩の武家出身であったが、二人の接点は他にもいくつか見出すことができる。

まず鷗外が津和野を出て父とともに上京した際、年長者としてその道中に付き添ったのが山辺丈夫なのである。その後の人生においては「鷗外日記」中に「山辺丈夫」の名が四回ほど確認できる。本節では上京時の経緯、そして「鷗外日記」中での山辺丈夫について精査し、二人の交流について解き明かしていきたい（二人には西周邸で共に寄寓していたという接点もあるのだが、それについては後述したい）。

上京時の経緯、その後の交流

森鷗外の手による自伝『自紀材料』には以下のように記されている（抜粋）。

明治五年 十一歳。六月二十六日石見国鹿足郡町田村の居を出で、父と東京に向ふ。八月向島小梅村に僦居す。十月頃西周の家に寄寓す。進文学舎に入る。（略）

明治七年 十三歳。新年に東京医学学校予科に入る。（略）

明治九年 十五歳。（略）是歳東京医学学校本郷元富士町に移れるをもて、予も本郷の寄宿舎に転ず。⁽³³⁾

これに沿って読み解いていくと、鷗外は明治五年六月二六日津和野の自宅を出て父とともに上京し、八月（上旬）東京に到着し、向島の父の借家に移っている。その後、西周邸に寄寓し、東京医学学校（筆者

注…のちの東京大学医学部）に入学し、学校の移転によって寄宿舎に移り住むまでの四年近くを西周邸で過ごしている。

上京の際に同行したのが山辺丈夫であるが、鷗外はそのことを一切記録していない（借家に移る前に亀井家下屋敷に滞在していた事実にも触れられていない）。このとき鷗外は一一歳、丈夫は二三歳で大人と子どもともいえる程の年齢差があった。上京直後の写真を見ればそれは一目瞭然である（写一3参照）。丈夫の評伝には「丈夫氏は種々森家一行の世話をせられた」ことが書かれてある。

明治四年七月になると、津和野藩が廃止となつて、浜田県となつた、封建廃止の結果、藩と云ふ者が無くなれば、山辺家も王臣と



写一3 津和野より上京の頃
（左から西周、従者、森静男、森鷗外、山辺丈夫、西紳六郎）
（文京区立森鷗外記念館提供）

なり、唯一個の浜田県士族に過ぎないので、従て是れ迄は藩の公費を以て修業をした丈夫氏は、学資が無くなつた、学生として学資に窮乏を告ぐる程の打撃はない、そこで暫らくは実父の清水格亮氏から学資を受けて居たが、明治五年の六月には、一旦郷里へ帰り、八月には家族を引纏め、津和野を引払つて、東京に出で、実父の居られる向島須崎村へ移住した。此の上京の時に、森林太郎氏の一家も、一所に津和野を出発し、丈夫氏は種々森家一行の世話をせられたと云ふことだ³⁴

紡績事業は丈夫氏の生命で有て、此の事業に全生涯を捧げられたが、然かし其の趣味は、決して狭小な方ではなかつた、其の少年時代に神童の称の有つた程、読書に趣味が有て、漢学の造詣も深く其の雅号を孤山と称し、詩も作られた、其の作詩は不幸にして散逸し明治十五年の洋行日記の中に、唯二詩を留むるばかりで有るが、然かし詩の事に付ても、趣味は有つた。和歌は大分残つて居る、晩年には少からず作られ、特に明治四十四年の洋行の道中などは、頗る多く作られた。著者が明治二十二年に初めて知遇を得た頃、森鷗外氏から、『柵草紙』を丈夫氏へ送くつて居られたが、丈夫氏は喜んで此の純粹の文学雑誌を読んで居られ、其の読み了つた分を著者へ賜はつた(傍点…筆者)³⁵

右にあげたように、評伝内のこの記述からは丈夫が文学的な素養も持ち合わせていたことと、鷗外が明治二二年に創刊したばかりの『柵草紙』を丈夫のもとに献本していたことが分かる。

「鷗外日記」からみる山辺丈夫

森鷗外が残した膨大な日記の中に、山辺丈夫の名が登場するのは四回である。それぞれについて見ていきたい。

① 明治二〇年九月一三日「山辺丈夫訪はる。逢はず」³⁶

ここでの舞台はドイツである。

このとき鷗外はドイツ留学中で、明治一七年一〇月ベルリンに到着して以来、ライプツィヒ、ドレスデン、ミュンヘンなどを經由し、再びベルリンに戻りベルリン大学コッホ教授のもとで細菌学の研究をしていた。明治二〇年九月二二日には石黒軍医監に随行し万国赤十字総会に出席し日本代表として演説をしており、丈夫の来訪はその直前の時期でもあった。

一方の丈夫は、大阪紡績会社の社用で機械の買付をするため、同年五月から十一月まで、イギリスを中心に米欧州を周っていた。

このとき、鍵となつた人物が亀井茲明である。さきほど見たように茲明は美学を学ぶため、前年からベルリンに留学中であつた。丈夫が「機械購入の爲めに、英国へ赴かれた時、茲明公は独逸の伯林に居られたので、丈夫氏は忙かしい時間を割いて、伯林へ赴かれた」³⁷のだという。この時の丈夫の行程を記した日記がある。

九月十日 晴 朝七時十分リヴァプール出発、十二時十分倫敦着、三井に至る、大阪工場よりの電報二通を受取る。返電を發す。午後八時二十五分、独逸に向て、ホルボルンを出發す
 九月十一日 晴 朝六時半、フラツシングを出發し、夜十時半、伯林に到着す、亀井氏、楠氏と停車場に迎へらる
 九月十二日 晴 亀井、楠両氏と共に、伯林市内、諸処珍らしき

所の見物に終日を費やす

九月十三日 曇 本日も諸処見物、晩には亀井楠両氏に晚餐を饗
 応す

九月十四日 曇 朝七時四十五分伯林出發、夜十時フラツシング
 に到着す³⁸⁾

これを見ると、丈夫がベルリンに到着したのが九月一日の夜一時半、その際に茲明が出迎えてくれている。翌二日には、茲明と共にベルリン市内の観光に出かけている。

鷗外が「山辺丈夫訪はる。逢はず」と記した当日一三日にも丈夫と茲明は観光をしたのち夕食を共にし、翌日一四日朝に丈夫はベルリンを後にした。

この時期、茲明は鷗外から生活面で支援を受けており親しい間柄であったはずで、共に晚餐を囲もうと企図したのであるうか。鷗外が会えなかったのか、会わなかったのか、この記述からは読み取れない。

② 明治四一年一二月二日「山辺丈夫に託して井上大将光の遺族に玉串料を送り遣る」³⁹⁾

「井上大将光」とは、陸軍大将井上光のことである。井上はこの日記の記された四日前、明治四一年一二月一七日に死去している。鷗外とは日清戦争従軍時に同じ第二軍配属（井上は参謀長、鷗外は軍医部長）であった。また鷗外が小倉に赴任した際は、井上が第一二師団軍長、鷗外が第一二師団軍医部長として親しい付き合いがあった。

鷗外の長男、森於菟によれば「父の小倉における役所の生活は相変らずの精励恪勤で師団長井上光中将ともよかつたらしい。その命に応じて独逸の戦術に関する書を講じた」ということである⁴⁰⁾。

鷗外が小倉を去り東京に戻ってから六年後、井上光の死に際し、なぜ鷗外と丈夫との間で玉串料の遣り取りがあったのだろうか。

鷗外と井上との当時の関わりについては、明治四一年五月六日の新聞記事に靖国神社での招魂式で共に参拝したことが記録されている⁴¹⁾。また同年一二月八日の記事には、井上が重病で「京都帝国大学医院」に入院し「森医務局長を始め大に心配し居れり」との記述があり、井上と鷗外との間柄が井上の死の間際まで近いものであったことがわかる⁴²⁾。

更に、井上の死亡記事を見ると次のような記述がある。

二十一日午前十時頃嗣子太郎氏は二人の令姉と親戚諸氏併に陸軍省特派葬儀顧問重見砲兵大佐と共に阿倍野火葬場に至り同場事務員立会の上故大将の遺骨を収容して帰邸し葬儀委員より葬儀費の収支決算報告を受けし(略)⁴³⁾

京都で死亡した井上は、「阿倍野火葬場」で遺骨になったのである。この記述から、鷗外は井上の遺族と近い場所にいた山辺丈夫を頼りに、遺族への玉串料を託した可能性も読み取れる。

③ 明治四三年一一月一日「山辺丈夫来話す」⁴⁴⁾

記述も短いため、鷗外と丈夫の間で何の話をしたのかは不明である。この頃、鷗外は明治四〇年から亀井家家政相談人、丈夫も明治二九年から亀井家家政相談人その後亀井家家令等を歴任していたため、亀井家に関するところだろうか。もしくは前月に丈夫の子息格亮の結婚式があったため、その話題も出たのだろうか。

④ 大正四年三月三日「山辺丈夫に書を寄す」⁴⁶。

「鷗外日記」の中で、山辺丈夫に関する最後の記述が「山辺丈夫に書を寄す」である。これは大正四年四月に発表された鷗外の史伝小説『津下四郎左衛門』に関するものであった。『津下四郎左衛門』は明治二年一月五日に起こった横井平四郎（筆者注：幕末の儒学者、横井小楠）暗殺事件を扱った作品である。初出は大正四年四月『中央公論』であり、大正八年一〇月一九日に加筆、大正八年一二月に『山房札記』として春陽堂から刊行された。

執筆経緯に関し、作中では以下のように記述されている。

大正二年十月十三日に、津下君は突然私の家を尋ねて父四郎左衛門の事を話した。聞書は話の殆其儘である。君は私に書き直させやうとしたが、私は君の肺腑から流れ出た語の権威を尊重して、殆其儘これを公にする。只物語の時と所に就いて、杉孫七郎、青木梅三郎、中岡黙、徳富猪一郎、志水小一郎、山辺丈夫の諸君に質して、二三の補正を加へただけである。⁴⁶

作品執筆にあたり鷗外は、暗殺者津下四郎左衛門の息子である津下正高からの「聞書」を「殆其儘」用いて、史実に関する「時間」と「場所」に関し、「山辺丈夫」ほか当時を知る五名に問い質し、「二三の補正」を加えて構築した作品だと述べている。

森鷗外から山辺丈夫へ質問の書状

（大正四年）三月三日 大分県別府亀之湯 山辺丈夫宛

拝啓益御清康奉賀候陳バ先頃承候明治二年横井平四郎暗殺ノ折ノ

事ニ就キ左ノ件々御記憶有之候ハ、御教示被下度願上候 三月三日 東京市本郷区駒込千駄木町二十一 森林太郎 山辺丈夫様
一、寺町ハ南北ニ長キ町ナルガ事変ノアリシハドノ辺ナリシカ
二、当時ノ太政官ハ御所内ニアリシカ又イヅレナリシカ、横井ノ駕籠ハ寺町ヲ北ヨリ南ヘ通りカカリシコトト思フ、イカゞ
三、丸太町ニアリシ四條隆譚ノ役所（先頃御話ニ承候）ノ名ハ何局ナリシカ（筆者注：文末に寺町丸太町附近の地図有り）

山辺丈夫から森鷗外へ返信の書状

一 事変ノアリ場所ハ確乎ト分ラザレドモ〇印ノ辺ナラント思フ
二 当時ノ太政官ハ御所内ト思フ我々ハ常、公卿御門ノ警護ノ任ニ当リ大久保木戸諸公ガ常、出入セルヲ看タリ
三 四條公ノ役所ハ丸太町ノ軍務局ナリシナラン我々兵隊ノ拝謁スルヲ得ルハ此軍務局ナリシ目下裁判所トナリタル由

（筆者注：山崎一類によれば、この書状とともに「鷗外の書簡の地図に〇印を付して」返送された）⁴⁸

鷗外からの問い合わせ内容は、横井の暗殺が行われた正確な場所等についてであり、質問を受けた者は山辺丈夫以外にも五名いるため、本来なら一人ひとりにつき精査すべきであるが、紙幅の都合もあり今回は割愛する。

ここで確認しておくべきなのは、暗殺が実行された明治二年一月五日、このとき山辺丈夫が現地である京都に居り、しかもそれが藩命によるものだったことである。

明治元年は王政維新の大業の成功した年である、茲監公は勤王家

として知られ、長州討伐にも対せられた人で有るから、いよく幕府と京都との争ひとなつた時、兵を京都の守護に出された、茲監公の伝記の中に『慶應四年六月二十三日朝旨を奉じ、藩兵を京師へ出して、闕下の守衛に任ず』と有り、更らに『御所御守衛被仰出候通、徴兵十二人、京師へ差越、闕下不慮の備に被差置候事』と有る、此の徴兵十二人の中に、丈夫氏も加はつて居る⁴⁶

丈夫は、戊辰の役に際し、亀井茲監公の命で徴兵一二名のうちの一⁴⁷人として慶應四年七月京都に赴いた。そして明治二年春頃まで過酷な軍隊生活を送っていたのである。

森鷗外は『津下四郎左衛門』を執筆するにあたり、当時のことを正確に知り得る人物を探した。そうして頭に浮かび上がったのが、津和野藩主の命により京都に召し出された山辺丈夫だった。このことから鷗外の心裡で、山辺丈夫が「津和野藩出身の武士」として捉えられていたことが指摘できるのである。

2. 森鷗外と山辺定子

「山辺定子は鷗外の初恋の人であった」という説がある⁵⁰。真偽のほどはさておき、そのような想像を喚起するに足る事実が存在していた。

二人は上京直後の若く多感な時期、西周邸で共に寄寓していたのである（なお、定子は鷗外の二歳年上である）。

彼らには、藩の御典医の家系に生まれたこと、加えて医師である父が婿入りしたという共通項もみられる。

元々、森家と山辺家（相沢家）とは家族同士の付き合いがあった。特に鷗外の父静男は親しい交わりがあったようである。山辺定子の伝

記では静男について「津和野の医師で山辺家の親戚である。鷗外氏は氏の長男である」との記述がみられる。「山辺家の親戚」という箇所について根拠を確認することはできなかったが、伝記の著者は定子の親族の一人でもあり、彼にも親戚同様に感じられるほど近い間柄であったと推察できる。

森静男は山辺夫妻の結婚式にも出席しており、その後も山辺家のかかりつけ医の一人だったようである。定子の産後の肥立ちが悪く静男に往診してもらったこと⁵¹、丈夫の姪や養母が大病に罹った際に静男の診察を受けたことなどが記録されている⁵²。

西升子『磯菜集』刊行および西升子古稀の宴にて

定子の結婚が決まり西周の邸宅を出てから実に三四年後、山辺定子と森鷗外とが邂逅する機会が二回ほど生まれた。そのいずれもが、西周夫人である西升子をめぐるのであった。

明治四三年四月、西升子の古稀を祝して歌集『磯菜集』が刊行された。この際に編纂者を務めたのが、升子の姪であるという以上に関わりの深い定子であった。鷗外は自らを「西氏の族なる石見国人 源高湛」として「序文」を捧げ、上京直後の西周邸に寄寓していた頃の回想をしている。

「磯菜集序」

おのれ若かりし日始て都に出でて、西周ぬしの家にありき。神田西小川町なる長屋門ある家の玄関と応接所との間の部屋に起臥して、日ごとに本郷壹岐坂なる進文学社といふ学校に行き通ひぬ。かくて月日を経ぬる程に、学問は周ぬしの教導を受けしこと多く、操行は夫人升子の君の訓戒を蒙りぬること数なり（略）。

かくいふは西氏の族なる石見国人 源高湛⁵³

定子は『磯菜集』の編纂をしたばかりではなく、巻末の最後の頁に「跋文」を寄せている⁵⁴。長年の時を経て、定子と鷗外とはこの『磯菜集』の中で共演を果たしたのである。

なお、定子が編んだこの歌集には、夭折した定子の長男、龍一を悼む歌も入っており、定子と升子との間で悲しみを共有し合っていたことも偲ばれる⁵⁵。

『磯菜集』の刊行後すぐ、西升子の古稀を祝う宴が開かれた。この時の記録を鷗外も書き残している。

明治四三年五月二九日の「鷗外日記」には次のようにある。

風雨。西升子七十の賀筵に水交社にゆく。水交社の名は赤松則良の撰びし所にて、偕行社は西周の撰びし所なりと、赤松語る⁵⁶。

ここには西升子の「七十の賀筵」に参加するため、鷗外が「水交社」に赴いたことが記されている。水交社は日本海軍軍人を対象とした倶楽部組織で、その本部は築地にあった。水交社の名付け人として挙げられた「赤松則良」は海軍中将男爵であり、西周とは文久二年共にオランダ留学して以来の親しい間柄であった。そして何より、赤松則良は鷗外の離縁した最初の妻・赤松登志子の父親であった。比して、陸軍軍人の組織である「偕行社」の名付け親は「西周」。西は鷗外と登志子の結婚を取り持った人物でもあった。この日の「鷗外日記」の短い記述から、鷗外の人生に降り掛かった往時の出来事が想起される。

一方、定子の歌集にも、定子が西升子の「七十の賀筵」に列席して

いたことが記載されており、鷗外と定子はこの日、共に同じ空間に居たことがわかる。ただ、そのことに関する記述は残されていない。

(賀宴を水交社にて催はされしに)

客人のつどひいはへるこのむしろきみがめぐみを仰がぬはなし

山辺定子

さまざまのうきてふうきを摘つくしこの花の宴にあへる君かな

山辺定子

「四」 西周——鷗外・丈夫・定子を繋ぐ人

これまで森鷗外、山辺丈夫、山辺定子について見てきたが、この三人の結接点となり得た人物がいた。西周である。本節では西周と各人との関係性を検証していきたい。

1. 西周について

西周 略歴

まずは西周(文政二—明治三〇年)の略歴について確認しておきたい⁵⁸。

西周は津和野藩医西時義の長男として生まれた(父時義は、森家九代森周菴の子であり、鷗外の祖父白仙とは兄弟関係である。よって森鷗外と西周とは親戚関係にある)。藩校・養老館で学んだのち家業の医学を継ぐつもりでいたものの、二〇歳のとき藩主の命により儒学を修めることになる。本人一代限りの、言うなれば「一代還俗」である。

翌年から養老館の教官を務めていたが、藩命により江戸に出て蘭学を学ぶ。より自由な修学環境を求めた結果、二六歳のとき津和野藩を

脱藩。そののち幕府の「番所調所」に入所し（この頃、西升子と結婚）、文久二年、幕府初の海外留学生一六名の一員としてオランダ・ライデン大学に留学する。

慶應元年に帰国し、徳川慶喜の側近となるが、明治元年沼津兵学校の開設にともない、頭取として着任する（沼津兵学校は徳川家がフランス式の近代的な軍制を目指し開校したものである）。明治三年には明治政府の要請により上京し兵部省に出仕、以後長年にわたり中央政府のもとで陸軍軍制、師範教育に携わる。晩年には元老院議員、貴族院議員を務め、臨終に際し勲一等男爵を授けられた。

津和野藩と西周

津和野藩からは西周・森鷗外を筆頭に、多くの「明治文化の先駆者」が輩出されている。

歴史的・地理的にみた場合、津和野藩は「三十六万九千石の外様雄藩の長州藩」と「徳川幕府の親藩 六万一千石の浜田藩」に挟まれた「四万三千石の外様小藩」であり、「国を思う精神を柱とした視野の広い、独創的で実学的な人材を養成しなければ生き残れない運命」であった。⁵⁹

天明六年、第八代藩主亀井矩賢が藩校「養老館」を設立して学問を奨励し、嘉永元年第一代藩主（亀井家第二代）亀井茲監が国学（本学）と蘭医学を設置し、養老館の改革を行った。

西周も幼少期よりこの養老館で学んでおり、養老館の教官も務めていたのであるが、安政元年、脱藩をした。この頃の脱藩は重罪であるが、藩主より「永の御暇」を賜った形となり、親族にお咎めは無かったようである。

脱藩後、西周が旧藩主亀井茲監の命により赦され帰藩したのは実に

一五年後であった。この時の西は、オランダ留学を経験し、中央政府で軍事制度や教育制度の刷新に携わり着々と実績を積んでいた。

明治二年、西は頭取を務めていた沼津兵学校から一〇〇日の特別休暇を得て帰藩した。亀井茲監は賢君として名高く、時代の動乱の中で人材育成こそが津和野藩の生きる道であると切実に考えた。茲監公に招かれた西は「西洋文明の真相を説いて頑迷を開き、文武教育の緊要なことを上申して『文武学校基本並規則書』を草し」た。⁶⁰このことが津和野藩の教育制度に変革をもたらしたのである。

周は藩校の将来を担う人材を抜擢、彼らに学費を与え東京への留学をさせる案を具申した。この案は、明治三年の太政官の「成績優秀者を大学南校へ貢進するように」との布告もあり、津和野藩、貢進生制度となり実現した（傍点…筆者）。⁶¹

津和野藩貢進生制度

元々「貢進生」とは「日本近代高等教育の原点」にあたる制度であり、明治三年より「近代的なエリート」を養成するため各藩から優秀な若者（原則、年齢は一六歳から二〇歳までに限る）が選別され、「中央集権的な国家に有能な人物を育成する目的」のもと東京に集められた。⁶²翌明治四年の廢藩置県により藩が消滅したため本来の貢進生制度は消失した。しかし西周の進言により、津和野藩内で独自の進化を遂げ「津和野藩貢進生制度」として継続がなされたのである。

この恩恵を受けたのが山辺丈夫である。丈夫は優秀者として津和野藩の貢進生に選ばれ明治三年上京し、翌年には西周の育英舎で学ぶことになる。

2. 西周と山辺丈夫

上京した山辺丈夫が育英舎に通うまでの経緯につき、定子の談話がある。

廿歳の時、有栖川宮の仕官を辞して、更に藩命で選ばれた六七名の青年と共に、洋学の勉強に東京に出ました。明治三年の三月です。

当時東京には福沢先生その他の塾がありました、しばらくそんな処に通つてゐた様です。(略)西は廃藩置県と共に東京に移りまして、漢洋の学塾を設けました。神田の西小川町でしたか、そこに旧緒大名の息子さん達が塾生となつて多勢住みこんでられた様です。西がこうして、東京に塾を開きましたので山辺も同藩の關係より早速この塾に通ふことになりました、西の教を受ける様になりました。⁶³

また丈夫の伝記には次のようにある。

山辺丈夫君(略)の英学に於る造詣は漸く深し。七年八月に至り、同人社の外二三の英学塾の聘する所となりて、英学を教授し、約一年間旧藩主亀井伯に英語を指南したり。此間君は、英語教授の傍ら当時英学者として錚々の間へありし西周氏に就き、専ら英書を研鑽し、遂に同氏邸に寄寓するに至れり。君が西邸への寄寓は、君に学修の好機会を与へたるのみならず、亦君に与ふるに君が終身苦樂を共にすべき好配を以てせり。九年十月六日君が師事する西先生及び同僚の媒介に依り、相沢氏を娶りぬ。新婦名は定子、参州西尾松平和泉守の典医相沢朮氏の長女にして、明治

初年東京に移り、当時親戚關係にある西氏邸に在りしなり。時に君二十六歳、夫人芳紀正に十七なりき。⁶⁴

君は西周氏邸に寄寓して料らずも奇縁によりて好配を得たり。(略)類ひ稀なる良縁たりしなり。君が恩師及び知友の媒介によりて娶りたる夫人は、才能徳操両つながら兼備へ(略)君が事業界に於ての成效は、夫人内助の功を以て其源因の一に数へえざるべからず。⁶⁵

これらの引用部分には丈夫の上京後から結婚までの経緯が語られているが、人生の節目節目に西周の決定的な影響があることがわかる。西周が携わった津和野藩貢進生制度で上京をし、西の私塾育英舎に通い、そこで英語を習得した。亀井茲明公に随従してのイギリス留学が丈夫の将来を開いたことは先に述べたが、そのきっかけとなったのも西の存在があつてこそであつた。

丈夫が西周邸に寄寓していたのは明治七年八月頃から、相沢定子と結婚するまでの明治九年九月頃までである。

3. 西周と山辺定子

西周と山辺定子との関わりにつき、定子本人からの談話がある。

西も津和野の藩士ですが、医者もしておりましたので、私の父の相沢湛庵(筆者注…朮の別名)と申しますのも松平公の家臣で医者でありました關係から、とりわけて大層親しくしております。(略)

私は明治七年十五歳の正月、父に伴はれて上京し、先に御話し

した西小川町の西周の屋敷に参りました。それ以来其処ですつと西の許で勉強することになりました。こんな訳で西の門下でありました山辺と知り、西の御世話で山辺に嫁ぐことになったのです。⁶⁶

定子の伝記には次のようにある。

刀自は幼時西の叔父叔母に愛せられ、四五歳の頃には殆んど西家に在つて育つたといふ位で（略）西家に寄寓したのは十五歳の時であつた。明治七年一月二十八日父に伴はれて参州西尾を出発し、同二月五日東京西小川町一丁目の西家に着いたのである。これより先周氏夫妻から刀自の両親宛て、女子を田舎に置いてはと思ふから東京へ出し稽古事や行儀見習をさせる様にと勧め越せしも、彼是躊躇して居つた所、周氏の両親が東京から石州津和野へ帰る途次、わざ／＼西尾へ立寄り周が年来の御恩に報いたいと申して居るから、お定さんを東京へお出しなさいと懇懇勧められたので、（略）刀自を伴れて上京したのであつた。爾来刀自は西家の一員となつて、叔父叔母の世話になつてその用を達し、叔母からは礼儀作法、裁縫などを、叔父からは漢文や英語ををそはり、数学は附近の福田と云ふ学校に通つて習つた。（略）その中に年も経つて山辺家に嫁するまで西家の世話になつてをつた。⁶⁷

刀自が西家に寄寓して居つた時、丈夫氏も西家の育英舎に在つて、勉強の傍ら周氏の依頼で亀井茲明公に英語を教授して居つたので、朝夕顔を合せ、又周氏夫妻の用事を伝へたり、時には食事を共にすることもあつて互に克く知り合つて居つたが、格亮氏夫

妻併に喜勢子氏が西家に来て親しく本人を見てからは非貫ひたいと相沢家に申込まれた。然るに朮氏にはまだ年も若いし田舎もので修養も充分でないからとて一応断られたが、再三の申込であるので、それではとて松岡隣氏に依頼し、その女婿佐野契氏夫妻を媒酌人として、明治九年十月六日日出度婚儀が整つた。時に丈夫氏は二十七歳、刀自は十七歳であつた。その披露は向島の植半楼で、その席に連つた人々は喜勢子氏を始めとして、清水格亮氏夫妻、相沢朮氏夫妻、西周氏夫妻、清水清氏、岡野周吉氏、松岡隣氏、森静雄氏（津和野の医師で山辺家の親戚である。鷗外氏は氏の長男である。）⁶⁸

西升子が定子の叔母にあたり親しい関係であつたことは先にみたが、これらの引用部分からは西と定子の父親も御典医の家系であつた共通項から懇意であつたことがわかる。また定子が「四五歳の頃には殆んど西家に在つて育つた」というように、子どもの居なかつた西夫妻にとりわけ可愛がられていたことがわかる。そして「お定さんを東京へお出しなさいと懇懇勧められた」とあるとおり、定子の上京のきっかけもまた西周であつた。

定子が西邸に寄寓していたのは、明治七年二月頃から結婚が決まつた明治九年九月頃までである。

4. 西周と森鷗外

先に森鷗外が上京後西周邸に寄寓したことを指摘した。「磯菜集序」で「おのれ若かりし日始て都に出でて、西周ぬしの家にありき。神田西小川町なる長屋門ある家の玄関と応接所との間の部屋に起臥して、日ことに本郷壹岐坂なる進文学社といふ学校に行き通ひぬ」と記

された箇所がこれに該当する。同じく鷗外の『ギタ・セクスアリス』にもこの頃のことを彷彿とさせるような一節がある。

僕は本郷壱岐坂にあつた、独逸語を教へる私立学校にはいつた。(略)向島からは遠くて通はれないといふので、その頃神田小川町に住まつてをられた、お父様の先輩の東先生といふ方の内に置いて貰つて、そこから通つた。

東先生は洋行がへりで、撰生のやかましい人で、盛に肉食をせられる外には、別に贅沢はせられない。只酒をずいぶん飲まれた。それも役所から帰つて、晩の十時か十一時まで翻訳なんぞをせられて、其跡で飲まれる。奥さんは女丈夫である。⁶⁹⁾

西周と鷗外との関わりでいうならば、鷗外の最初の結婚相手は、西の親友赤松則良の子女・赤松登志子であり、西夫妻が媒酌人を務めた。離婚を機に鷗外と西との関係は気まずいものとなつたが、西の死後、その親族に請われて鷗外は西の遺稿を整理し、『西周伝』を執筆、刊行した。ほかにも東京津和野小学校同窓会の講演会において西周に關して言及がある。⁷⁰⁾

森鷗外 上京のきっかけ

明治二年、津和野に帰省した西周は(略)当時津和野藩知事であつた亀井茲監の諮詢に依じて西洋文明撰取の急務であることを説いたので、新時代の到来を察知した亀井知事は、藩中第一の秀才を選抜、「貢進生」として東京に留学させることになつた。

(略)養老館や城中で秀才の噂の高い鷗外にも内密で東京留学の命令が下つた。これまた西周の進言に拠るものである。西周に

とつて、自分の近い親戚筋の森家から貢進生が出ることは榮譽なことであつた。⁷¹⁾

西周の進言が、のちの津和野藩貢進生制度へと繋がつたことは先にみたが、鷗外もその候補者の一人であつた。これには鷗外と西とが「近い親戚筋」であることも関係していた。

この時、父静男は鷗外が若年であることを理由に申し出を一旦断つているが、「森家にとつては、林太郎の推挙を仲介した人物が新体制における要人であり親戚でもある西周であつたことは極めて重要な意味を持つものであつた」のである。⁷²⁾

鷗外が自らの来歴を語つたものに次のような記述がある。

吾家は累世津和野侯に仕へし医なり。(略)明治二年西周氏津和野に來たりて、東京に出でよ世話せむといはる。是より先慶應三年より、藩の学校養老館に入りて漢学を受け、旁和蘭語を修めしが、明治五年館を出で、家君と俱に東京に遷り、西氏の家に寄居し、進文学社といふ私学校に通ひて、独逸語を修む。明治六年大医学学校に入りて、明治十四年卒業す。⁷³⁾

ここにある「明治二年西周氏津和野に來たりて、東京に出でよ世話せむといはる」というのが、まさに西周が脱藩を赦されて津和野に帰藩した時の話であり、鷗外の津和野からの上京も西周の勧めによるものだったことがわかる。

鷗外が西周邸に寄寓していたのは、明治五年一〇月から明治九年一二月頃までの間である。

おわりに

以上、これまでに論じてきた点の総括をしていきたい。

森鷗外・山辺丈夫・山辺定子は西周の働きかけをきっかけに上京し、明治七年から明治九年頃、西家に寄寓し共に生活した期間が存在した。上京したことでだけでなく、彼らの結婚に関しても西周の意向が大きく影響していた。

本稿の冒頭に戻り、鷗外がなぜ「山辺君墓表」を書いたのかという疑問に立ち返り、森鷗外と山辺丈夫との関わりをいま一度確認していきたい。

山辺丈夫 葬儀

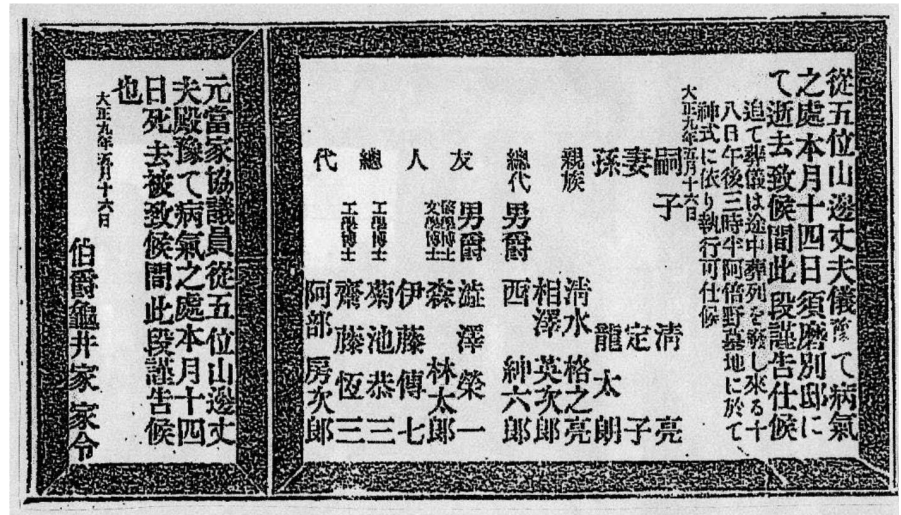
丈夫が死去したのは大正九年五月一日、阿倍野墓地にて葬儀が行われたのは五月一日である。ここに、山辺丈夫の葬儀に関する新聞広告がある（写—4参照）。

「従五位山辺丈夫儀予て病氣之処本月十四日須磨別邸にて逝去致候間此段謹告仕候 追て葬儀は途中葬列を廢し来る十八日午後三時半阿倍野墓地に於て神式に依り執行可仕候 大正九年五月十六日」との文面がある。広告主として最初に親族の名が並び、「総代 男爵 西紳六郎」の名が続く。西紳六郎は西周の養子である。その後「友人総代」として六人の名が並んでいるが、そのうちの一人が森鷗外なのである。まず「男爵 渋沢栄一」、次に「医学博士 文学博士 森林太郎」の名が見える。続いての「伊藤伝七」「菊池恭三」「斎藤恒三」「阿部房次郎」はいずれも丈夫が社長を務めていた東洋紡績の創立メンバーであり、丈夫の側近であった。

渋沢栄一と山辺丈夫とが昵懇の間柄であったことは先にみたとおり

森林太郎「山辺君墓表」のこと

であり、「友人総代」に名があがるのも何ら不思議ではないが、その渋沢のすぐ次に「森林太郎」の名が連なっていることに驚かされる。鷗外は丈夫の葬儀に参列はしなかったものの、山辺の旅立ちを見送った者の一員であった。また、山辺丈夫の葬儀に際して、鷗外とも交流のあった津和野町長・望月幸雄が弔辞を述べている。



写—4 山辺丈夫葬儀案内 (出所：『東京朝日新聞』1920年5月18日)

君ハ実業界ニ忙殺セラル、身ヲ以テ終生旧君亀井家ノ為メニ尽瘁シテ余沢ヲ報シ時ニ其家職トナリ事ニ当リテ令名ヲ揚ケ又郷人ニ親ミ親戚朋友ニ厚クシテ其子女ヲ教育シ其事業ヲ補助シ金円ヲ投スルコト多シ君資性温厚高潔謙譲人ニ媚ビズ胸宇磊々トシテ日月ノ如シ君ハ武家ニ生レ厳格ナル武士的教育ヲ受ケタル素質ニ加フルニ英国紳士ノ風ヲ兼ネ其意志ハ堅実ニシテ名利ヲ趁ハス榮達ヲ求メス実ニ現代得易カラサル人ニシテ後進子弟ノ取テ範トスヘキナリ我カ町人才ヲ出スコト少カラスト雖モ実業界ニ於テ君ヲ出シタルハ寔ニ我カ町ノ最モ名誉トスル所(略)⁷⁷

ここで端的に指摘されているのが、「君ハ武家ニ生レ厳格ナル武士的教育ヲ受ケタル素質ニ加フルニ英国紳士ノ風ヲ兼ネ其意志ハ堅実ニシテ名利ヲ趁ハス榮達ヲ求メス」という箇所である。山辺丈夫は津和野藩の「武家ニ生レ」「武士的教育ヲ受ケ」、その一方で留学を経験し、「英国紳士」風の嗜みをも感じさせるといふ、近世的な素養と近代的な素養を併せ持つ存在であったといふのである。これは森鷗外とも通底する共通項である。

森鷗外も山辺丈夫も津和野藩の武家に生まれ武士としての教育を受けた。そして津和野藩校である養老館で学び、優秀な成績を修めた。その結果、津和野藩から才能を認められ、西周の働きかけをきっかけに一家をあげて相当な覚悟をもって共に上京した。

また二人とも、海外留学を経験し自由な学問の雰囲気に触れ、西欧の先進的な文化を感得した。しかしその一方で、旧来の慣習や亀井家との主従関係を捨て去ることもできなかった。

山辺は幼い時より官途で出世するのを嫌つて、御維新となつてか

らは独立して身を立てるこそ、男子の本懐だと云ふ様なことを考へておりました様で、こんな気持は御維新の時の渋沢老公の御氣持とも近いものではないかと考へます(略)⁷⁸

山辺は英国で余り学資が豊かではありませんでした。亀井公に御つきして参つたのですが、たとへ主家とは云へ、昔と違つて御借りした金は返さねばならぬと云ひ、もし今亀井公より金銭上で御世話になると、将来自分が一かどの者になつた時、困ると言つて余計な金は一文も御借りしませんでした。⁷⁹

右は丈夫に関する定子の回想だが、ここに時代の変化の中で揺れ動く青年丈夫の気持ち垣間見える。

山辺定子が見てきたもの

「山辺君墓表」の中で、鷗外と丈夫との間に私的な交流があつたことには一切触れられていない。しかしその書かれた経緯をみると、共に郷里津和野を出て上京し、刻苦勉励の末、分野は違えども片や実業家として片や文学者として名を上げたからこそ、「山辺君墓表」に両者の名が刻まれることになつたのである。「山辺君墓表」を書き上げる中で、丈夫との思い出も鷗外の胸に去来したのであろうか。

若き日の山辺丈夫と森鷗外との努力の軌跡を、その傍らで目にしていたのが山辺定子である。彼らがまだ何者でもなかつた頃から、辛勞辛勞を重ね、立身出世していった姿をである。彼らが積み上げてきた業績はそのまま日本の近代化の足跡でもあつた。

日本の産業革命は「イギリスと同じく綿糸紡績業を中軸として、短期的には一八八〇年代半ばから九〇年代末にかけて進展した」⁸⁰が、こ

これは丈夫が立ち上げた大阪紡績の創業から隆盛の時期とも重なっており、日本の近代化に山辺丈夫が果たした役割は大きい。

丈夫氏が此の紡績業を起したのは、単に私利私益を目的とした者ではなかつた、実に日本帝国の欠陥を補はんとする愛国の精神から、之に従事して居たので有る、洪沢子爵が大蔵大輔を辞した後、民間の実業界に身を投ぜられたのも、日本の国富を増進せんとする精神から来て居たので、決して一身の富を願ふたのではない、若し洪沢子や丈夫氏の心に、一身の利害のみを考へて居られたならば、兎ても創業の艱苦に堪え得られる者ではない、其の能く艱難を凌ぎ困苦を突破して、成功を収め得たのは、全く此の産業を起して、帝国の欠陥を補ひ、之に依て国富を増進せんと欲する、熱烈なる愛国心の発動で有つたからで有る⁽⁸⁾

右の文章は、丈夫が紡績業の発展に身を捧げ、尽力してきたことを明言している。鷗外が「吾邦紡績之業」において糸の改良を重ね、「減輸入増輸出」を成し遂げた丈夫の功績を称賛したように、まさに「日本の紡績業の盛衰は、自分の双肩に荷へる意気を以て」⁽⁹⁾邁進してきたのである。夫を側で支えた定子の献身も一方ならぬものであった。丈夫の墓表と寄り添うように並んだ定子の歌碑の大きさからも、共に助け合ってきた夫婦の有り様がみえる。

しかしそれほど人生を賭してきた紡績業のために一人息子の命を奪われてしまうという、母親として最大の悲劇に見舞われることにもなった。定子は日本の近代化の光の部分も闇の部分も見えてきたのであった。

山辺丈夫の逝去から二年後、「山辺君墓表」碑の完成を見ることな

く、鷗外も帰らぬ人となった。二人を見送つてのち、夫の「生きた証」を銘記してくれた鷗外を偲び、定子は次のような歌を詠んだ。人が去つてからも、紡がれた言葉は墓表の上に留まり、一人残された定子の心の中にも深く刻まれたのである。

(森鷗外博士をおもひいでて)

吾が背のため石文の文字かきましたし君さへ今はいまさざりけり

山辺定子⁽⁸⁾

注

- (1) 横村久子「大阪市南霊園の墓標調査からみた近代から現代の変容(1)」京都女子大学大学院現代社会研究科編『現代社会研究科論集』第七号、二〇一三年三月。
- (2) 「山辺君墓表」『鷗外全集 第三十八巻』(岩波書店、一九七五年)を参考に、筆者作成。
- (3) 洪沢栄一「山辺君と紡績創業時代」宇野米吉『山辺丈夫君小伝』紡績雑誌社、一九一八年。
- (4) 「委蛇録」『鷗外全集 第三十五巻』岩波書店、一九七五年。
- (5) 山辺丈夫の伝記には「森氏は青年時代から丈夫氏と深かい縁故が有つたので欣然として其の文を撰まれたが、それから間もなく逝去され、親しく其の建碑を見られなかつたのは、誠に遺憾で有つた」との記述がある(石川安次郎『孤山の片影』福音印刷株式会社、一九二三年)。
- (6) なお、津和野嘉楽園には「山辺丈夫頌徳碑」がある。建立は大正一四年四月。撰文は相沢英次郎(定子の義弟)、書は田村登、篆額は洪沢栄一「久而誠矣」。旧藩主亀井茲監像を囲むように、山辺丈夫、福羽美静、大國隆正ら津和野藩を支えた家臣たちの碑が建てられている。
- (7) 大島田人・八角真「森鷗外人と文学のふるさと」(十)『明治大学教養論集』一七九号、一九八五年三月)を参考に筆者作成。
- (8) 刀自には叔母君に当らるる西周男爵夫人升子刀自は、賢夫人のきこえ高かりしが、歌に志ふかく、兄君相沢朮ぬしと共に、吾が父に学びをられしをもて、定子刀自も父の門に入りて斯の道をふみわけられ、父

- (9) 逝きて後はおのれに詠草を示され、爾来数十年絶ゆることなし（佐佐木信綱「序文」山辺定子『すまの浦浪』山辺清亮発行、一九三七年）。刀自の母扇子氏は（略）少女時代に松平乗全公の奥方に召出されて仕へ、十八歳の時朧氏を迎ふることとなつてお暇をいただいた。松平家の御奥に奉仕して居る間に読、書、算、裁縫、押絵、和歌などを学び、琴、茶、花などを稽古し、殊に琴は好める道として最も得意であつて、西周氏夫妻に教へたこともあつた。（略）和歌も御奥に在る時から詠んで居つたので、夫朧氏と共に井上文雄、加藤千浪、佐佐木弘綱の諸先生の添削を受け、殊に弘綱先生とは親しかつた（父と母）山辺定子『浦のみるめ』東京国文社、一九二九年）。
- (10) 「山辺龍一氏」山辺定子『浦のみるめ』東京国文社、一九二九年。
- (11) 「痛ましき最後」『大阪毎日新聞』一八八九年二月一三日。
- (12) 「龍一氏の葬儀」山辺定子『浦のみるめ』東京国文社、一九二九年。
- (13) 「十二月九日」石川安次郎『孤山の片影』福音印刷株式会社、一九二三年。
- (14) 一子龍一を不時の災禍で失つてから、悲しくて悲しくて恰も掌中の珠を取られた様に、その悲しさその寂しさ堪へがたく（略）橋本綱常博士からあなたは最早子供は出来ませんと宣告されてあつたので、最早家を継がす可き子供の獲がたいと知るものから一層悲しかつた（清亮氏と君代子氏）山辺定子『浦のみるめ』東京国文社、一九二九年）。
- (15) 山辺清亮は、養子に迎えられたのち京都府立第一中学校を経てイギリスに留学し、五年間紡績に関する学問と技術を学んだ。帰国後は、相沢家側の親族である君代（子）夫人と家庭を築き、東洋紡績で工場長、重役を務めた（清亮氏と君代子氏）山辺定子『浦のみるめ』東京国文社、一九二九年）。
- (16) 山辺定子『浦のみるめ』東京国文社、一九二九年。
- (17) 丈夫氏の実家清水家は宇多源氏の後裔で、初代清恵の時因州鹿野の城主亀井茲矩公に仕へ（略）格亮氏は（略）後には御側御用人又は表御用人として藩政に参画し、幾多の重要な任務に当られ、亀井家の柱石となつた。明治維新後には津和野藩の大参事となつた。明治新政府が出来て木戸孝允公その他より出仕を勧められたが、亀井家のために
- 尽すと云つて断じて受けなかつた。明治八年亀井家家令となり、明治二十六年古稀の齡を迎へて其職を辞した。（略）夫人佐渡子氏は同藩土吉松専左衛門正齡氏の二女である。佐渡子氏は武士的教養を受けたので（略）丈夫氏が山辺家の養子となつてからも、終始武士の心得やら養家に対する心得を教訓せられた。（略）格亮氏には二子あつて丈夫氏はその次男である。長男は清と云つて（略）はじめ津和野藩主亀井隠岐守茲監公の近侍となり、明治維新に際し藩主に扈從して屢次江戸津和野間を往来し、廢藩置県後同家従となり、終始亀井家のために尽す所あつた（清水格亮氏と佐渡子夫人）山辺定子『浦のみるめ』東京国文社、一九二九年）。
- (18) 山辺家の祖先は大職冠藤原鎌足公から出で、（略）大和国山辺郡に移つて（略）山辺姓を名乗る様になつた（略）正殊氏に至つて初めて因州鹿野の城主亀井茲矩公に事へた。（略）山辺家にかかる由緒ある家柄であるから津和野藩では特に重んじ、亀井家御祖先の祭には必ず山辺家の者に参列せしめらるると云ふ事である。（略）八代正義氏は（略）重用せられて藩の重要な任務に服したが、慶應二年三月十五日病氣の爲め家督を養嗣子丈夫氏に譲り（略）明治三年七月一日五十五歳で逝去した（山辺家）山辺定子『浦のみるめ』東京国文社、一九二九年）。
- (19) 従軍するに際し、「家令家扶及び写真技師等七名を引連れ曩に渡清し各地戦地の実景を撮影し其種板数十枚を携帯し」とある（亀井伯の戦地写真）『東京朝日新聞』一八九五年一月八日）。
- (20) 當時の死亡記事には次のようにある。
從三位勲四等伯爵亀井茲明氏ハ病氣に依り去十八日薨去せらる氏ハ旧石州津和野藩主なり征清の役大本營の認可を得自費にて従軍し砲烟彈雨の間に馳駆して交戦の実況を撮影せしもの六百余种に上り日清戦史編纂上裨益を与ふること尠からず然るに其後肺病に罹り今や竟に起たず享年三十六（亀井伯薨去）『東京朝日新聞』一八九六年七月二一日）。
- (21) 「亀井家へ尽忠」石川安次郎『孤山の片影』福音印刷株式会社、一九二三年。
- (22) 「茲明公との交情」石川安次郎『孤山の片影』福音印刷株式会社、一九二三年。
- (23) また、大阪紡績の株主の多くが旧大名であつたため、「大名紡績」と呼ばれていたエピソードもある。
三軒家紡績は（略）機械が英国から取寄せた新奇のものだといふので、

- 東京その外から大阪へ出張して参観に来られた方も少なくなかった、その方々の内にはわざわざ三軒家まで車を走らされた方もあつて、山県公が見えられたり、知事さんが見えられたり、渋沢さんを始め重役の方々が見えられたり、その外名士の方が多数に見えられるのと、会社の株主の多くが旧大名であつたので近所では大阪紡績ではない大名紡績だといつてをつたと云ふ事である（「大名紡績」山辺定子『浦のみるめ』東京国文社、一九二九年）。
- (24) 「丈夫氏英国留学中」山辺定子『浦のみるめ』東京国文社、一九二九年。同前。
- (25) 「濃尾並に関東の大震災火災」山辺定子『浦のみるめ』東京国文社、一九二九年。
- (26) 『ギタ・セクスアリス』『鷗外全集 第五卷』岩波書店、一九七二年。同前。
- (27) 「津和野藩の格式」山崎一類監修『森鷗外 明治知識人の歩んだ道』森鷗外記念館、一九九六年。
- (28) 「森鷗外旧宅」〔津和野文化ポータル〕ホームページ (URL: tsuwano-bunkanet)。二〇一三年五月閲覧。
- (29) 「津和野城下絵図」山崎一類監修『森鷗外 明治知識人の歩んだ道』森鷗外記念館、一九九六年。
- (30) 「津和野城下絵図」山崎一類監修『森鷗外 明治知識人の歩んだ道』森鷗外記念館、一九九六年。
- (31) 「明治四十一年日記」『鷗外全集 第三十五卷』岩波書店、一九七五年。
- (32) 「自紀材料」『鷗外全集 第三十五卷』岩波書店、一九七五年。
- (33) 「種々の打撃」石川安次郎『孤山の片影』福音印刷株式会社、一九二三年。
- (34) 「趣味」石川安次郎『孤山の片影』福音印刷株式会社、一九二三年。
- (35) 「独逸日記」『鷗外全集 第三十五卷』岩波書店、一九七五年。
- (36) 「マルセーユ出帆前の書面」石川安次郎『孤山の片影』福音印刷株式会社、一九二三年。
- (37) 「明治二十年洋行日記（原文は英文）」石川安次郎『孤山の片影』福音印刷株式会社、一九二三年。
- (38) 「明治四十一年日記」『鷗外全集 第三十五卷』岩波書店、一九七五年。森於菟『父親としての森鷗外』筑摩書房、一九六九年。
- (39) 「靖国神社祭典 雨中の招魂式」『東京朝日新聞』一九〇八年五月六日。
- (40) 「井上大将の病氣」『東京朝日新聞』一九〇八年二月八日。
- (41) 「井上大将遺骨（大阪）」『東京朝日新聞』一九〇八年二月二日。
- (42) 「明治四十三年日記」『鷗外全集 第三十五卷』岩波書店、一九七五年。
- (43) 「大正四年日記」『鷗外全集 第三十五卷』岩波書店、一九七五年。
- (44) 「津下四郎左衛門」『鷗外全集 第十六卷』岩波書店、一九七三年。
- (45) 「大正四年書簡（番号七八五）」『鷗外全集 第三十六卷』岩波書店、一九七五年。
- (46) 山崎一類「津下四郎左衛門」論考『森鷗外・史伝小説研究』桜楓社、一九八二年。
- (47) 「徴兵として京都へ登る」石川安次郎『孤山の片影』福音印刷株式会社、一九二三年。
- (48) 吉野俊彦『鷗外・五人の女と二人の妻』文芸春秋社（ネスコ）、一九九四年。吉野は詳細な調査を重ね、「未完の長編『灰塵』のヒロインであるお種さんのモデルは山辺定子であつた」という説も唱えている。
- (49) 刀自が龍一氏の追懐談をした事がある。（略）津和野の習慣は出産後床を離れるのは三日目で（略）七夜にはお祝ひとて朝から働いた。それが身体にさはつてその晩から熱が出た。翌朝森静雄さんに診ていただいた処、是は産褥熱だといはれ、それからといふもの日々熱が昇降して（略）顛倒してしまつた。そこで母も丈夫も手の下し様なく、急ぎ森さんと呼んだ（「山辺龍一氏」山辺定子『浦のみるめ』東京国文社、一九二九年）。
- (50) この後三人の医者も呼んでも快方に向かわず、結局定子の実母が医師の家系出身の知識と自らの出産経験を活かして治療したこと、それに対し三人の医者も「之を見て居つて良き修行をしたと云はれ感心せられた」という挿話が続く。
- (51) 清氏の令嬢の三才になるのが、大患に罹り、終に死亡された（略）、格亮氏の最も愛されたる孫嬢の事とて、薬研堀の秋元氏、同郷の森静男氏（林太郎氏の父君）の診察を受け、尚赤十字病院長の橋本綱常先生をも招聘して、診察を受けたが、遂に治療の効を奏しなかつた（略）喜勢子刀自の大患に罹られた（略）明治十一年八月上旬から、腹痛甚しく、痢病に罹られ、二箇月も臥床せられた、森静男氏の治療で、幸ひに快復されたが、此の間の看病は、定子夫人の一手で之を行ひ、八坂神社へ参詣しては、丈夫氏の無事と母堂の全快を祈られた、然るに其の薬価を払ひ尚謝礼をせねばならぬが、それに差支へたので、根来氏へ相談して、二十円を借り、それを以て森氏へ払はれた（「病難」石川安次郎『孤山の片影』福音印刷株式会社、一九二三年）。
- (52) 西升子著、山辺定子編『磯葉集』私家版、一九一〇年。
- (53) わが叔母君の、ことし七十歳の御齢になりませるをことほぎまつるとて、年頃のあつき御恵の片はしにむくひまつらむと、この一卷をすり

巻にもおして、人人にさげまつるになむ。

春ごとに若えましつゝ、こよろぎの

磯たちならし磯菜つまさね 山辺定子

(55) (廿二年十二月山辺丈夫氏の男龍一子のみまかりしをいたみて)

知らざりき庭の小菊の千代は経で一夜の霜に枯れむものとは 西升子

おもひきやありし姿のうつしを涙のたねになさむものとは 西升子

(山辺龍一子のおくつきにまうでて)

おくつきにむかへばいと志のばるゝ過ぎし昔のをさな姿の 西升子

(56) 「明治四十三年日記」『鷗外全集 第三十五卷』岩波書店、一九七五年。

(57) 明治四十三年五月二十七日 君代(筆者注…定子の養嗣子清亮の妻)

を伴ひ叔母西升子古稀賀宴に列席の爲め上京し、六月八日帰阪す(山辺定子『すまの浦浪』山辺清亮発行、一九三七年)。

(58) 清水多吉『西周一兵馬の権はいずこにありや』ミネルヴァ書房、二〇一〇年。

(59) 松島弘『藩校養老館』津和野歴史シリーズ刊行会、二〇〇〇年。

(60) 沖本常吉『津和野藩』津和野町教育委員会、一九六八年。

(61) 松島弘『藩校養老館』津和野歴史シリーズ刊行会、二〇〇〇年。

(62) 唐澤富太郎『貢進生―幕末維新期のエリート』ぎょうせい、一九七四年。

(63) 「山辺定子氏談話」洪沢栄一伝記資料刊行会編『洪沢栄一伝記資料 第十卷』竜門社、一九五六年。

(64) 「君の青年時代」宇野米吉『山辺丈夫君小伝』紡織雑誌社、一九一八年。

(65) 「家庭に於ける君」宇野米吉『山辺丈夫君小伝』紡織雑誌社、一九一八年。

(66) 「山辺定子氏談話」洪沢栄一伝記資料刊行会編『洪沢栄一伝記資料 第十卷』竜門社、一九五六年。

(67) 「西家寄寓」山辺定子『浦のみるめ』東京国文社、一九二九年。

(68) 「結婚」山辺定子『浦のみるめ』東京国文社、一九二九年。

(69) 「平夕・セクスアリス」『鷗外全集 第五卷』岩波書店、一九七二年。

(70) 「混沌」『鷗外全集 第二十六卷』岩波書店、一九七三年。

(71) 大島田人・八角真『森鷗外―人と文学のふるさと―(五)』『明治大学教養論集』一三四号、一九八〇年三月。

(72) 正規の候補年齢が一六―二〇歳であったのに対し、この時の鷗外はまだ八歳であった。

(73) 大島田人・八角真『森鷗外―人と文学のふるさと―(五)』『明治大学教養論集』一三四号、一九八〇年三月。

(74) 森鷗外『徳富蘇峰氏に答ふる書』『国民新聞』明治三十三年六月二三日(『鷗

外全集 第二十二卷』岩波書店、一九七三年)。

(75) 『東京朝日新聞』一九二〇年五月一八日。なお、この新聞広告の隣に「伯爵亀井家令」の名で「元当家協議員従五位山辺丈夫殿」の死亡記事が掲載されている。

(76) 山辺丈夫の葬儀の日の「鷗外日記」には「十八日。火。雨。参寮。」とある。「参寮」とは、当時鷗外が宮内省帝室博物館総長兼図書頭として、東京虎ノ門の宮内省図書寮に出勤していたことを示す(その前後数日も、博物館と図書寮とに規則的に勤務している)。よって大阪での山辺の葬儀には参列していないと推察できる(「委蛇録」『鷗外全集 第三十五卷』岩波書店、一九七五年)。

(77) 「津和野の追悼会」石川安次郎『孤山の片影』福音印刷株式会社、一九二三年。

(78) 「山辺定子氏談話」洪沢栄一伝記資料刊行会編『洪沢栄一伝記資料 第十卷』竜門社、一九五六年。

(79) 同前。

(80) 高村直助『産業革命』吉川弘文館、一九九四年。

(81) 「愛国的精神」石川安次郎『孤山の片影』福音印刷株式会社、一九二三年。

(82) 「紡績事業の爲めに尽瘁」石川安次郎『孤山の片影』福音印刷株式会社、一九二三年。

(83) 山辺定子『すまの浦浪』山辺清亮発行、一九三七年。

(84) 石川安次郎『孤山の片影』福音印刷株式会社、一九二三年。

(85) 宇野米吉『山辺丈夫君小伝』紡織雑誌社、一九一八年。

(86) 沖本常吉『津和野藩』津和野町教育委員会、一九六八年。

(87) 唐澤富太郎『貢進生―幕末維新期のエリート』ぎょうせい、一九七四年。

(88) 洪沢栄一伝記資料刊行会編『洪沢栄一伝記資料 第十卷』竜門社、一九五六年。

(89) 島根県立大学西周研究会編『西周と日本の近代』ペリカン社、二〇〇五年。

(90) 清水多吉『西周一兵馬の権はいずこにありや』ミネルヴァ書房、二〇一〇年。

(91) 高村直助『産業革命』吉川弘文館、一九九四年。

(92) 瀧本和成『森鷗外―現代小説の世界』和泉書院、一九九五年。

(93) 西升子著、山辺定子編『磯菜集』私家版、一九一〇年。

(94) 平川祐弘編『森鷗外事典』新曜社、二〇二〇年。

【参考文献】

〈単行本〉

石川安次郎『孤山の片影』福音印刷株式会社、一九二三年。

宇野米吉『山辺丈夫君小伝』紡織雑誌社、一九一八年。

沖本常吉『津和野藩』津和野町教育委員会、一九六八年。

唐澤富太郎『貢進生―幕末維新期のエリート』ぎょうせい、一九七四年。

洪沢栄一伝記資料刊行会編『洪沢栄一伝記資料 第十卷』竜門社、一九五六年。

島根県立大学西周研究会編『西周と日本の近代』ペリカン社、二〇〇五年。

清水多吉『西周一兵馬の権はいずこにありや』ミネルヴァ書房、二〇一〇年。

高村直助『産業革命』吉川弘文館、一九九四年。

瀧本和成『森鷗外―現代小説の世界』和泉書院、一九九五年。

西升子著、山辺定子編『磯菜集』私家版、一九一〇年。

平川祐弘編『森鷗外事典』新曜社、二〇二〇年。

松島弘『藩校養老館』津和野歴史シリーズ刊行会、二〇〇〇年。
 森於菟『父親としての森鷗外』筑摩書房、一九六九年。
 山岡浩二『明治の津和野人たち』堀之内出版、二〇一八年。
 山崎一穎『森鷗外・史伝小説研究』桜楓社、一九八二年。
 山崎一穎監修『森鷗外 明治知識人の歩んだ道』森鷗外記念館、一九九六年。
 山崎國紀編『森鷗外を学ぶ人のために』世界思想社、一九九四年。
 山辺定子『須磨の松風』横浜活版社、一九二二年。
 山辺定子『浦のみるめ』東京国文社、一九二九年。
 山辺定子『すまの浦浪』山辺清亮発行、一九三七年。
 吉野俊彦『豊熟の時代―森鷗外』PHP研究所、一九八一年。
 吉野俊彦『鷗外・五人の女と二人の妻』文芸春秋社（ネスコ）、一九九四年。

〈論文〉

大島田人・八角真「森鷗外―人と文学のふるさと―（五）」『明治大学教養論集』一三四号、一九八〇年三月。
 大島田人・八角真「森鷗外―人と文学のふるさと―（十）」『明治大学教養論集』一七九号、一九八五年三月。
 橋口勝利「近代日本の工業化と山辺丈夫」慶應義塾大学通信教育部編『三色旗』第八四六号、二〇二三年二月。
 林量三「一葦航す―鷗外・森林太郎 上京コース私論」『鷗外』第六六号、二〇〇一年一月。
 横村久子「大阪市南霊園の墓標調査からみた近代から現代の変容（一）」京都女子大学大学院現代社会研究科編『現代社会研究科論集』第七号、二〇一三年三月。

